

ハイデルベルク信仰問答講解説教 39 「礼拝をまもる意味」(2012年6月17日 礼拝説教)

【聖書箇所】

安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、牛、ろばなどすべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる。あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである。(申命記5：12-15)

それで、兄弟たち、わたしたちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています。イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通して、新しい生きた道をわたしたちのために開いてくださったのです。更に、わたしたちには神の家を支配する偉大な祭司がおられるのですから、心は清められて、良心のとがめはなくなり、体は清い水で洗われています。信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか。約束してくださったのは真実な方なのですから、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう。互いに愛と善行に励むように心がけ、ある人たちの習慣に倣って集会を怠ったりせず、むしろ励まし合ひましょう。かの日が近づいているのをあなたがたは知っているのですから、ますます励まし合おうではありませんか。(ヘブライ10：19-25)

【説教】

本日は、十戒の第四戒「安息日を心に留め、これを聖別せよ」について信仰問答から共に聴いてまいります。わたしたちキリスト者にとっての安息日、それはこの日曜日の礼拝であることは言うまでもありません。しかしそこに本当の安息があるということがどれほど理解されているのでしょうか。

忙しい毎日の生活。そういう中で日曜日に礼拝に集まることを冷ややかに見ている人も少なくないでしょう。今はそんな心のゆとりはない。日曜日に教会に行く人たちはごく一部の時間に余裕のある人たち。また仕事を退いた人々の余暇。教会に行く時間があつたら、少しでも体を休めて月曜日からの仕事に備えなくては。また普段なかなかできない家族との交流を深めなくては。多くの人々はそれが休むことだと考えています。そういう休息が人生には必要だと。

また一方で、休むこと自体を否定的に捉える風潮もあります。休むことは、途中で中断することです。何でもそうですが、何かに取り組んでいる時に、中断するのは難しいのです。また中断することをいやがるのです。育児のために仕事を休むことを社会は推奨しています。しかしなかなか思い通りにはならないようです。社会全体が休むことに慣れていない。休むことが悪いことのように感じるのです。だからあまり休暇を取りたがらないと聞きます。あるいは休んでいる間に仕事が無くなってしまふのではないか。そういう不安もあるそうです。

ある方がとても興味深いことを言われました。学校の先生は忙しい。でも先生が忙しいと生徒の学力が下がる。どうしてか。忙しい先生は授業の準備ができない。間に合わせて授業に臨む。そうすると子どもに影響が出るのだそうです。先生にゆとりがあれば、授業の準備がしっかりできる。そうすると子どもたちにもよい。そのように、もしわたしたちが休息を取らず、このままゆとりがない状態が続くならば、必ずどこかに歪みが生じてくるでしょう。それは社会全体にとっても良くない結果をもたらすのであります。

では、どうしたら休息を得ることができるのか。本当の休息とは何か。実に多くの人々が、レジャーに行き、家族と過ごすことが休みと考えています。しかしはっきり申し上げてそれは間違いです。それは表面的なことと言わざるを得ません。わたしたちにとって本当に必要な休みとは何か。それは魂の休息です。それは今日の信仰問答問103で「永遠の安息」と言われていることでもあります。果たしてそんな安息があるのか。それはレジャーに行くことで得られません。そうではなくて、日曜日の礼拝こそ魂の安息、永遠の安息があると教会は教えているのです。日曜日の礼拝とわたしたちの休息とどう関係がある

のでしょうか。

この安息日の意味を知るためには、何よりも聖書からその意味を知る必要があります。そこで十戒の御言葉に注目いたしますが、実は聖書では十戒は出エジプト記と申命記の二カ所に出てまいります。あとで読み比べていただいたらよろしいかと思いますが、特に第四戒、安息日の戒めはこの二つの十戒では異なる点があります。それはその理由付けであります。

出エジプト記では、「六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」(20：11)とあります。ですから、なぜ安息日をまもるのか。それは神さまが天地を造られ、七日目に休まれたから、その七日目を安息日とするのだというのです。これは創造の完成として安息日を祝うという理解になります。

一方、申命記の方では、「あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである」(5：15)とあります。つまり安息日を守る理由がここではエジプトからの解放と結びつけられています。

ですから聖書では、安息日について二つの理由付けを示しています。創造の完成とエジプトからの解放。これはどちらが正しいということではなく、どちらも大切な意味を持っていると理解してよいでしょう。特にこの二つを結びつけ、わたしたちが何かの支配から解放されることこそ、神さまの創造の完成であるとすることはできないでしょうか。

では、それは何から解放されることでしょうか。言うまでもなく、それは罪からの解放であります。罪を犯した人間が、この罪の支配から解放されること、それが本来の人間として回復され、神さまの創造の御業、その目的に適合することなのであります。そしてそこにわたしたちの得るべき真の安息があります。どうして日曜日に礼拝をまもるのか。それはそこで罪からの解放が告げられ、更にはわたしたちが神さまに造られた人間としての本来の形に戻ったこと、その創造の御業が完成されたことを覚えて祝うためなのであります。

その罪からの解放と創造の完成は、イエス・キリストの救いの御業を通して行われました。主イエスが十字架におかかりになられ、わたしたちのすべての罪を担われた。そして死んで、三日目によみがえられた。このキリストによってわたしたちは罪から解放され、神さまの創造の目的に適合新しい人間として御前に再び創造されたのです。特にキリスト教会は、安息日

を主の復活された週の初めの日、日曜日と決めました。それはキリストの復活こそ、罪に対する勝利であり、この復活のキリストに結ばれることがわたしたちの新しい創造の完成であると信じるからです。

この救いは、もちろん教会でなければ聴くことはできませんし、また体験することはできません。この救いを聴き、追体験する場所こそ、日曜日のこの礼拝の時間なのです。ハイデルベルク信仰問答の内容は、非常に具体的にこのことを示しています。

問103 第四戒で、神は何を望んでおられますか。

答 神が望んでおられることは、第一に、説教の務めと教育活動が維持されて、わたしがとりわけ安息の日には神の教会に熱心に集い、神の言葉を学び、聖礼典にあずかり、公に主に呼びかけ、キリスト教的な施しをする、ということ。

先ほど、申し上げたキリストによる罪からの解放と創造の完成は、毎週の礼拝説教において語られる内容となります。またそれは聖礼典、すなわち洗礼と聖餐が指し示すことでもあります。日曜日の礼拝で神さまの御言葉に聴き、聖餐に与ることで、わたしたちは罪からの解放と、創造の完成を毎週お祝いしているのです。それは他人事ではなく、自分自身の解放と創造の完成であります。その約束を聴く。そして新しい創造の完成である自分を始めるのです。それが「公に主に呼びかけ、キリスト教的な施しをする」これは礼拝生活と善い行いのことですが、そういう新しい生活へとわたしたちは導きます。

先週、鳩のひなの話をしました。カラスに襲われ巣から落ちてしまったひなです。その後、巣から落ちたひなを保護していました。やはり巣には戻れないのです。巣に戻れないことはひなにとって不安であり、えさを上手に食べることができず、だんだん弱っていきました。保護したわたしたちもどう世話をしようか分からないのです。そこで野鳥の保護センターに連れて行くことにしました。そこである程度成長するまで世話をしてから山に放すそうです。詩編に「あなたの祭壇に、鳥は住みかを作り、つばめは巣をかけて、ひなを置いています」（詩編84：4）という御言葉があります。親鳥のもと、そこがどれほど安心するか。わたしたちにとっても神さまのもとにあることが安心する場所なのです。

すべてにおいて、あるべきところにあることが自然であり、そこに本当の平安、安息があるのです。フィリピ書3章20節に「わたしたちの本国は天にあります」とあります。わたしたちのあるべきところは天、神さまのもとなのです。それを日曜日の礼拝は示します。わたしたちはこの世の生活をしていることが自然であり、そこに安息があると考えていますが、そうではありません。ここは仮の住まいです。神さまの御許こそ本来のあるべき場所なのです。このように礼拝をする時こそわたしたちは本来の自分に帰る場所なのです。その時にわたしたちは安らかなのです。信仰問答の後半を読みます。

第二に、生涯のすべての日において、わたしが自分の邪悪な行いを休み、わたしの内で御霊を通して主に働いていただき、こうして永遠の安息をこの生涯において始めるようになる、ということです。

もうすでにこの生涯において「永遠の安息」を始めることができるのは何と幸いなことでしょうか。それがこの礼拝です。ぜひ礼拝で神さまのもとに帰る永遠の安息を体験してください。それはどんなレジャーにも勝る本当の休息をわたしたちの人生にもたらしてくれるのです。お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神さま。この礼拝に集うことの喜びに気付かせてください。ここにわたしたちの帰るべき場所があり、ここでしか体験できない罪からの解放と創造の完成を豊

かに味わわせてください。礼拝に集えない兄弟姉妹たちを顧みてください。どうか礼拝に戻ることができますように導いてください。またわたしたちがこの礼拝の恵みを分かち合う者として働くことができますように強めてください。主の御名によって祈ります。アーメン。